

少子高齢化が進むなか、学校で高齢者と子供が交流する取り組みが各地で行われている。いっしょに授業を受けたり、給食を食べたり。核家族化や地域社会の希薄化で減った世代間のつながりを補い、子供たちのコミュニケーション能力や思いやりの気持ちをほぐす役割がある。「地域に開かれた学校」を進める効果もあるようだ。

「(1)(1)(1)、空いているよ」。教室に給食を持って入ってきたお年寄りの姿を認めると、児童うらいたっせいに歓声があがった。

11月上旬、岡山市立岡南小学校で、60〜92歳のシニアスクールの受講生と3年生が一緒に給食を楽しんだ。「牛乳飲んで、えらいなあ」「見て、野菜も食べべ」。同じメニューを囲んで会話が弾む。「食が細い子もシニアの方と一緒によく食べる」。担任の上森麻衣教諭(35)は驚く。

同市のシニアスクールは、学校の空き教室を利用して、地域の高齢者が国語や理科、美術などを1年間学ぶ。高校の元教師らが講師を務める。現在、岡山市内の3つの小中学校で行われ、岡南小には26人の受講生が週1日通う。授業のほか、児童と昔の遊びをしたり、給食を食べたりし、合同での遠足もある。

核家族化を補完

シニアスクールは2003年、市立岡輝中でスタートした。生徒の生活指導に取り組むなか、「地域の人に常に学校にかかわってもらいたい」との狙いから生まれた。「受講生もただ勉強するだけでなく、『地域の子供を育てる』一役を担うつもりで参加してくれる」。スクールを運営する特定非営利活動法人(NPO法人)の川上洋一さん

学校の「日常」でお年寄りと交流

学校内での世代間交流は、核家族化などで減った祖父母世代と触れ合う機会を補完する役割を果たしているようだ。

岡山市をモデルに06年度からシニアスクールを始めた札幌市の三里塚小。滝沢利文校長(57)によると、同校の児童のうち祖父母との同居世帯は約1割。スクールを始めた当初は、「児童もどうコミュニケーションをとっていいかわからなかったようだ」という。しかし合同遠足の体験などを通じ、児童が自ら「歯が弱いお年寄りとも交換できるよっ」と軟らかいお

(68)は話す。

子供に思いやりの心育つ

やつを持参するなど、「思いやりや相手を気遣う心が芽生え始めている」(滝沢校長)。高齢者側も孫世代との触れ合いを楽しんでおり、受講生の佐藤重治さん(71)は「未来を担う子供たちと触れ合えることがうれしい」と目を細める。

高齢者と子供がいっしょに授業を受ける例も。愛知県扶桑町は02年度から、近隣住民が町内の学校や学年、教科を自由に選び、1年間、小中学校の授業を聴講できる「聴講生制度」を導入。大人になっても学習意欲が旺盛な姿が子供たちの刺激になっているという。

村上萌子さん(71)は、町立扶桑中で英語を聴講し始めて3年目。現在は3年生の生徒と机を並べる。課される宿題も小テストも全く一緒。クラスメートの近藤和輝君(14)は「生徒と同じくらいしっかり勉強しててすごい」。佐藤大地君(14)も「僕たちより覚えるのが早い。自分も頑張ろうと思う」と話す。

橋渡し役が必要

ただ閉鎖的になりがちな学校関係者の中には、校内を開放することに難色を示す声も少なくなく、「視察は多いが後に続くケースは少ない」(同町教育委員会)のも事実。扶桑中の野木森広校長(51)も「当初は、外部の人が校内に入ってくることに抵抗があった」というが、実際には「むしろ聴講生が学校のことを好意的に地域に発信してくれる」という。

世代間交流に詳しい白梅

学園短大の草野篤子教授は「ただ高齢者と子供が仲良くするだけでなく、高齢者側の『最近の中学生は……』といった誤解を解き、相互理解を進めることにもつながる。地域づくりにも役に立つ」と評価。「学校と地域の人々をつなぐ役割を持つ人材を育てていくことが推進の力を握っている」と話している。

万事うまくやる、愉快なお話

と、がちょうたちが寒くなるかと心配になります。けれども取らないとおばあさんが寒くなる。

そこでおばあさんは、ぬれタオルで頭をしっかりとしばり、いすに座つ



「あたまを小さく

こころの一本

11月の声を聞いたと思ったら、風の冷たさに冬支度をせかされるようです。この本の主人公の小さなおばあさんも、穴のあいた毛布の代わりに、暖かい羽根布団がほしいと思

おばあさん



教室で小学生と一緒に給食を食べるシニアスクールの受講生(岡山市北区の岡南小学校)

授業や給食、机を並べて

アーチェリーは心と向き

合う競技。自ら模索すること成長がある、と教えて

問

学

ふ

まれ。20開本
宮本 7歳。

白

選考終了から大会の8月までほとんど食事できず、10